八木保育園の考え方と実践２

2013年8月30日公開保育研修にあたって

一部増補　２０１３／　　９／５

再増補・一部改稿　２０１３／１０／２３

未来を創る

園長　清流祐昭

子どもに関わるとは、未来を創ることです。保育に限らず、あらゆる分野において、子どもに関わることは、良きにつけ悪しきにつけ、我々の社会の未来を創っていることにほかなりません。保育は、未来を託された仕事です。保育に関わる私たちには、目の前の子どもたちや保護者に対する責任と同時に、広く社会一般、人類の未来に対する責任がある、と私は考えています。

＊　＊

日々の保育の中で考えたり、実践したことを、それぞれの職員が文章にまとめました。

社会福祉法人八木保育園　　672-8016　兵庫県　姫路市　木場 1203-1　　079-246-5060

目　次

1	生きる力をつける５歳児の保育	ぞう組（３・４・５歳）担任　山本英津子	3
2	幼児　環境認識について	きりん組（３・４・５歳）担任　田中綾子	5
3	ハンガリーのマイバ保育園研修に参加して　環境について学んだこと	ぞう組担任　濱中智華	7
4	ハンガリーのマイバ保育園研修に参加して 身体運動について学んだこと	きりん組担任　谷口春菜	10
5	乳児保育から幼児保育への連携	にじ組（１・２歳）担任　松本真菜美	12
6	育児担当制・流れる日課に出会って	そら組（１・２歳）担任　新居由希帆	13
7	乳児保育　情緒の発達	ゆめ組（０・１歳）担任　高井美保子	15
8	おむつ　布への移行	ゆめ組　担任　三木幸子	16
9	子どもの遊び、発達	うさぎ組（１・２歳）担任　斉田朋子	18
10	新入所　なかよし保育*	うさぎ組　担任　久保田美幸	19
11	乳児保育　補助保育士として	うさぎ組　補助　三木照代	22
12	八木保育園の給食と調理	調理師　南千秋・吉岡晶子	24
13	《再掲載》　八木保育園に６年間お世話になって	卒園児保護者　浦篤志	26
14	役割遊びとしての研究誌発行　あとがきに代えて	園長　清流祐昭	27

八木保育園の考え方と実践２

《幼児編》

１　生きる力をつける５歳児の保育

山本英津子　ぞう組（３・４・５歳）担任

２年前に姫路市では、市内の小学校と幼稚園、保育園が連携し、お互いに共通して指導すべきポイントが示された『姫路市幼児教育共通カリキュラム』が作成されました。保育所や幼稚園で「年長児」として自信をもって生活している子ども達が、小学校入学という環境の変化により感じる戸惑い。それを少なくするための指導方法についてお互いに協力し、連携していこうという取り組みです。実際に八木保育園ではどんな方法を実践しているのか、述べてみたいと思います。

学ぶ力

◆課業について

室内遊びをしている同じ部屋の中で自由参加（ただし、授業につながっていくため５歳児は必ず参加）として行う２０分程度の学習のことです。

◆　課業の種類と保育指針５領域との関連性

５領域	課業の種類
表現	音楽（わらべうた）・美術・文学
環境	環境認識・数
健康	体育

※ただし、人間関係・言葉については全てにあてはまる

これらをバランスよく保育計画の中に取り入れています。

自由参加だと参加しない子は学ぶ機会がないのでは？と思われるでしょう。確かに参加しない子もいます。しかし同じ部屋の中でおこなわれているので、耳で聞く、見るなどして、心の中では参加しています。実際、課業に参加していなかった子が違う日に課業でしたわらべうたの歌も遊び方も知っていたというのは珍しいことではありません。

もし、行われた課業の参加人数が少なかった場合には、計画や進め方に無理があったのではないかと、保育士がそれについて深く考える機会となります。全員一斉で行った場合は、分かった子、よく発言する子だけで課業が進むので、保育士は安心してしまい個々の子どものことを把握するのが難しくなります。自由参加だと、保育士はよりたくさんの子どもが参加できるように、活動の方法を工夫し、楽しく有意義な時間にしようと力を費やすのです。

◆子どもはいつ学ぶ？

幼児期の子どもはすべて好奇心や、発見する喜び、大人との結びつき、その場の雰囲気などで自ら行動し、その中で何かを学びます。

参加しないといけないからという理由でそこに座っていても意識がなければ何も見えないし、聞こえないし、考えることもしないでしょう。子どもに学ぶ気がなければ周りでいくらすばらしい保育内容が進んでいても、何も受け取ることはできないのです。むしろ怖いのは、座っているだけ・聞いているふりをしているだけという、その場をやり過ごす練習をしていることになっているということです。いくら子どもをよく知り計画された活動であっても一斉に活動し全員にあわせることは難しいのです。

私は以前、他園で勤務していた時には一斉保育をしていました。その時の私はまだ経験が浅かったこともありますが、「このような活動中にこんなにも子どもと会話をしていただろうか？」また「子どもの言葉に耳をかたむけていただろうか？」とよく思い出してしまいます。この方法で保育をするようになってから、子どもを平均的な○歳児の中での「その子」ではなく、昨日より今日の「この子」という見方がよ

り大きくなりました。そして一人ひとりの細やかな成長を敏感に感じとれるようになり、共に喜びあうことがさらに増えたと自分でも思います。

課業とは、子どもと作り上げていく時間であり、決して教えこむだけの行為ではありません。むしろ、一人ひとりのこころの引き出しに財産を蓄えていく行為なのではと勉強を続けていくうちに思うようになりました。

人と関わる力

◆１分間ゲーム

二人組みになり１分間テーマについて交代で話す。話す力、聞く力が育つゲームである。

◆わくわくノート

自分が経験したことなどを絵日記のノートの上段に絵で表現する。それを持ち帰り、絵を見て家族に話をする。家族は、子どもの話や聞いた感想などを下段の文字部分に書き残す。絵の表現力、話す力が育ち、家族との密な時間も持てるという、子ども、保護者、保育士とのつながりが深まるノートである。

幼児期は学ぶ力よりも人と関わる力の方のウエイトが大きい。これが小学校に近づくにつれて学ぶ力へと移って行くことになります。この人と関わる力は生活のあらゆる場面で経験ができるのは想像がつくと思います。生身の人間同士の関わりが少なくなってきている現代だからこそ、私たちはその場面を重要視し、欲張ってでも経験して欲しい。そう願うのです。

大きな行事の中で教えられた言葉ではなく、ごっこ遊び、わらべうた、描画など、人と人が関わる中での生きた言葉のやりとりを通して、生まれてから初めて経験し築いていく人間関係をやはりこの保育の中でたくさん経験してほしいと強く願うのです。

兵庫教育大学鈴木先生による保幼小連携の研修の中で、小学校入学までに育てたい力ということについて学んできました。三つの自立というものです。

学びの自立　・　精神的な自立・生活上の自立・・・この三つがバランスよく育つために八木保育園では、保育所保育指針・姫路市共通カリキュラムにのっとり、コダーイ保育に基づいて日々保育をしています。この三つの自立は、小学校で育てたい力である、**確かな学力・豊かな人間性・健康体力**へとつながり、これらは全て**「生きる力」**の基礎となっているというのです。

就学前の１月～３月という時期は卒園を前にして５歳児としての自覚がより高まる時期となります。子ども達は友達と活動する中でお互いの良さを知り、認めそれを生かして遊ぼうとします。

『仲間っていいな。仲間と一緒だと何倍も楽しいね。仲間とだから頑張れたよ！』

こんな風に、生まれてから６年ばかし経った子ども達は人と関わる喜びや幸せを感じるようになるまでに成長していくのです。

１年生になってすぐに効果がある保育、それも一つの保育方法だと思います。しかし、もし、いつかつまずいた時に何を糧にして子ども達は立ち戻ってくるのでしょうか？それは夢中になって仲間と遊んだ経験。自ら知りたい！どうしたら？なぜ？という思いや意欲をたくさん感じた経験。それを思い出すことこそが自分で切り開いていく道なのではないかなと私は考えます。

そういうことのできるたくましい子に育つため私たちはこの大事な幼児期にその部分に働きかける保育をしていきたいと思っています。

２　環境認識について

田中綾子　きりん組（３・４・５歳）担任

「環境認識」という言葉を、私は八木保育園に勤務して、初めて知りました。初めは、なんだか難しそうで、一体どんなことをすればいいのか分からず、なかなか取り組めない分野でした。しかし、研究会に参加し、自分が経験してみて、その楽しさが分かり、子どもたちにも経験させてあげたいと思うようになりました。

「環境認識」を簡単に言うと、「私たちを取り巻く全てのことを知ること」です。私たち大人も、知らないことがたくさんある世界の中で、知らない環境の中で過ごすことは、とても不安で心細いことだと思います。まして、産まれて３～５年の子どもたちなのだから、生活する中で知らないことが、大人以上にたくさんあって当然なわけです。
そこで、環境認識を行っていくとどうなるのか…？例えば
・交通ルール…「赤信号は止まる」ということが分かる　・動物…命の大切さを知る。むやみに潰さない
・人間…体を大事にする　・新学期…物の場所を知る　など

子どもたちは少しでも知っていることが増えると、様々な環境の中でも、安心して過ごせるようになるのだと思います。

「環境認識」として行っていなくても、当然子どもたちの周りには、たくさんの環境があります。子どもたちはその環境の中で、日々色々なことを経験し、たくさんの情報や、知識を得ていると思います。
ただ、それを意識せずに過ごしてしまうのではなく、「環境認識」として行うことで、年間を通して、テーマ（何について知ってほしいのか）を決めて満遍なく取り組むことが出来るのです。そのため、テーマを意識してより深く子どもたちと話が出来、子どもたちの漠然としていた知識が整理され、より子どもの興味を引き起こすことが出来るのです。

環境認識の収集コーナー

その年間を通して行うテーマの中には　①自然に関するもの（人間・動物・植物・季節・素材）　②社会に関するもの（交通・地域・家族と社会）　があります。これを、年間で満遍なく分けて、更に部分テーマとして深めていくのです。

しかし、「環境認識」で子どもの知識を整理する、より深めると言っても、大人が教え込むわけではありません。私たちは、子ども自身が興味を持ち、もっと知りたいと思えるような働きかけや環境を用意するのです。そのために、私たちの保育室には、部屋に入って一番目につく所に、環境認識のコーナーを設けています。そこには、「収集台」といって、子どもに見えやすい高さの棚を置き、大きめのホワイトボード又はコルクボードを置いています。そして、それぞれのテーマに応じた写真を貼ったり、図鑑を置いたり、パズルやゲームを用意したりします。家庭に呼びかけて、テーマに沿ったものを持ってきて頂くこともあります。テーマに関するものを１ケ所に集めることで、子どもたちも分かりやすくなり、興味を持ちやすくなるのです。

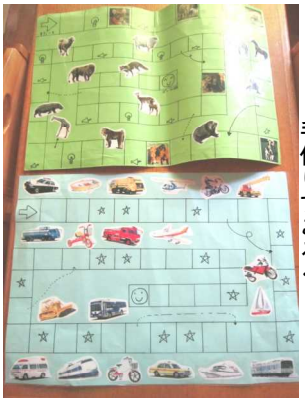
その他にも、子どもたちにそのテーマの中でどんな体験をさせてあげられるかを考えます。例えば、・
・植物…プランターで野菜を育てる、畑で何かを収穫する
・動物…ペットを飼っている人に見せてもらう、実際に何かを飼育する

・職業…近所のお店に入って、見る、匂う、何かを買う　　など

テーマ以外の経験でも機会があれば、体験させてもらいます。見るだけでなく、実際に触ったり、匂ったりと、五感を通した方が経験として残るでしょう。

他にも、経験・体験したことを思い出して、役割遊びが出来るように、道具を用意することも出来ます。それぞれの体験に、時間・場所・道具がプラスされれば子どもたちの遊びは広がっていくのです。例えば、

・職業…美容院ごっこ、病院ごっこ
・植物…畑づくり　　など


手作りすごろく

そして、興味を持った子どもたちの知識を、遊びを通して更に豊かに出来るように、課題あそびが出来るように用意をします。簡単に用意できるものに、手作りすごろくやメモリーカードがあります。
すごろくは、大人も遊びに加わり質問します。子どもの知っていることを引き出すのに最適です。そうやって話す中で、子どもの知識も理解でき、他にもこんなことがあるよと伝えることも出来るのです。

その他にも、お手玉ひとつで出来る、「早く答えて」というゲーム。大人が、子どもに質問をしながらお手玉を投げ、受けた子どもが、答えを言いながら大人にお手玉を投げ返すゲームです。例えば、

・知っている動物　　・〇〇の鳴き声
・知っている乗り物　　・〇〇の走る場所　　など

他にももっといろんな課題遊びがあります。（参考…遊戯集）
このような様々な経験や課題遊びを通して、子どもたちは各テーマについて、知っていることを増やして行きます。そして、この知っていることを整理するために、大人がねらいを持って意図的に行う『課業』をします。『課業』と言っても、特別難しいことをするわけではなく、遊びの中でしていた課題遊びを３～４つ組み合わせてする、１５分～３０分程度のテーマに関する遊びなのです。

課業　　きりん組　３４５歳児　年長９名　年中１２名　年少９名
テーマ　植物　　部分テーマ　①野菜　　ねらい：名称・外観
収集物：家庭から持ってきた野菜

①ふろしきの下には

並べた野菜の上に布をかけ、周りからは見えないようにする。

布の下に手を入れ、名前を言ってから出す。または、ヒントを聞いてそれに合う物を出す。そして、その野菜について、知っていることを聞いたり、どこで出来るのか（土の上？土の下？）を聞いて、子どもが知っていることを話せる場にする。

②早く答えて

・知っている野菜　　・○色の野菜　　・土の○に出来る野菜

←易　　難→

③○×クイズ

野菜のねらいに関わる質問を５～７問考える。

○×で場所を移動できるようにする

④穴あきクイズ

野菜カード（公文）を数種類、拡大カラーコピーする。

それらが入る大きさの封筒を用意し、コの字や逆コの字に切り込みを入れ、めくれるようにする。

１つずつめくってヒントを増やし、何の野菜か当てる。

⑤どれを見ているか

野菜カードを４枚置き、大人は３つヒントを出す。

どのヒントにも当てはまるものを４枚の中から１枚見つけるゲーム。

大人は、１つのヒントで選択肢が１つずつ減るように問題を考える

このような「課業」を通して、大人は様々なテーマで子ども達の興味を引き出し、知っていることを言葉にして話せる機会を増やしています。また、自ら知りたい、やってみたいと思えるようになることを願い、この環境認識を取り入れて実践しているのです。

３　ハンガリーのマイバ保育園研修に参加して

環境について学んだこと　　濱中智華　　ぞう組（３・４・５歳）担任

マイバ保育園に一歩入ると、その空間はとても美的で開放的であった。保育室を覗くと、それぞれのクラスの個性が感じられた。そこはまるで、一人ひとりの色が混ざり合い、新しい色みを見出しているような可能性を感じる空間だった。

どんな人を育てたい？

どんな保育者でありたい？

どんな保育園でありたい？・・・それは、なぜ？

国を越えて、共通すること。それは、とてもシンプルで無駄のない保育・実践であった。

環境を通しての保育

子どもの成長発達に合った玩具・遊具には、教育的な目的がある。それを使い、子ども達は遊ぶ。遊びは、乳幼児期には最も大切な活動である。

保育室には、台所コーナー・世話コーナー・机上コーナー・構造コーナー・描画コーナー・環認コーナーなどの室内環境がある。それぞれ一人ひとり自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ中で、遊びの条件に対して子ども達はよく発達する。例えば、お医者さんごっこやレストランごっこなどの役割遊びでは、役になりきる。そこで、ことばや表現方法・人間関係・運動機能などを練習し、学んでいる。しかし、子ども達は、学んでいると感じておらず、遊びの中でそれらを経験している。その経験は、その後の成長発達に表れる。

マイバ保育園の幼児クラスに入ると、室内の環境からその時の環境認識のテーマが何であるかをすぐに感じとることが出来た。それだけ、保育者がねらいとしていることや意図していることが感じるような空間になっていた。

※環境認識とは…子ども達が自分の身の回りの世界を知ること。自分の住む世界を知ることで、安心して過ごすことが出来る。そのために大人がテーマに沿って、ねらいを持ってするもの。

→家族・乗り物・職業など

環境認識のテーマが乗り物である場合…

保育室	園外
・乗り物のポスター・地図	・船・電車に乗る(経験)
・乗り物のパズル	
・乗り物を操縦する	＋保育士の言葉掛け・振るまい

↓(環境を通した保育)

テーマに対する経験が持てる

後日、遊びの中で、船を作る子・船長さんになってお客さんを乗せて船を操縦している子・船のパズルに興味を示し集中して取り組む子など、経験を思い出し遊ぶ子ども達の姿がある。

子どもの興味を広げ、子ども自身のモチベーションになるように、様々な方法でアピールし、働きかるものが環境なのではないかと思う。大人の用意した環境以上に子ども達の持っている可能性は、無限であり、その可能性をさらに輝かせられるような大人の関わりや援助は柔軟でなくてはならない。

次は、マイバ保育園の年長男児の例である。

男児が牛乳パックで船を作り始めた。周りの友だちが黙々と製作を進める中、その男児は製作を進めることが出来ず手が止まってしまう。作りたい気持ちはあるが、イメージ・アイデアが浮かばない様子が伺えた。手が止まり、製作を断念した男児はその場所を離れる。その時にふと目の前の壁に貼られている船の写真に目を留める。その写真をまじまじと見て、先程居た場所に戻り、真剣な表情で牛乳パックを様々な向きに変え、写真と照らし合わせながら、何か思いついたように製作を再開した。そして、船を完成させた男児の表情は、とても満足気であった。

これも、環境(壁に貼っていた船の写真)から、男児に働きかけ、それに男児が気付き、男児の思考を動かした。男児の〝作りたい〟というモチベーションになったと思う。環境からの情報に自ら気付き、考え

るという男児の活動が見られた。その船の写真も、保育者が意図的に、ねらいを持って用意したものであるからこそ、男児の活動の助けになったのだろう。

子どもの活動を予想した、計画された環境が保育の場に用意されていた。子ども達の生活する空間に、子ども達の成長を促す環境を整えていく。

保育者

子どもが、保護者から離れて、初めて出会う大人である。その保育者は、心からの愛情を持って関わる。また、その専門性と責任を持って、子どもを様々な角度から見て、子どものことを知る。目の前にいる子どもの発達段階から、遊びを通して成長を促す援助を考える。子どもの最善の利益が保障されるようなアクションを起こす。

例えば、手先の不器用な子どもがいた場合に、キラキラ光るビーズを提供し、ビーズにひもを通しアクセサリーを作ったり、いろいろな素材のものに触れ、感覚を確かめたりと子ども自身が〝楽しい〟〝もう一度やってみたい〟と思うような活動を提供していきたいと心掛けている。子どもは、遊びの中で充実感・達成感を得ながら、繰り返し練習することができる。子どものモチベーションとなるようなアプローチをしていきたいと思う。

子ども

子ども達は、内に秘める確かな力を持っている。大人は、さらに輝きが増すように、様々な可能性を提供していく。子ども自身が自分の力に気づき、自信を持つことが出来ると、また新たな事に挑戦してみようと思うようになるだろう。記憶に残る成功体験をたくさん積んでほしいと思う。自己肯定感を高め、自分に自信を持ち、自分を大好きになって欲しい。そのことは、その後の人生において大きく意味を持つことになると思う。

共に、大切に考えられていること

日本　保育指針第一章　総則３（２）オ

子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。

ハンガリー　ハンガリー乳児保育　保育指針　基本原則(必ず守らなければならないもの)

６．活発性と自発性、援助の原則

保育者の子どもに対しての愛情や受容や共感が、子どもの活発性や自発性を引きだす。安心を感じ、子どもの好奇心を引きだす人的・物的環境を生み出すことやその経験獲得の場を保障し、環境と密に関われるよう援助する。

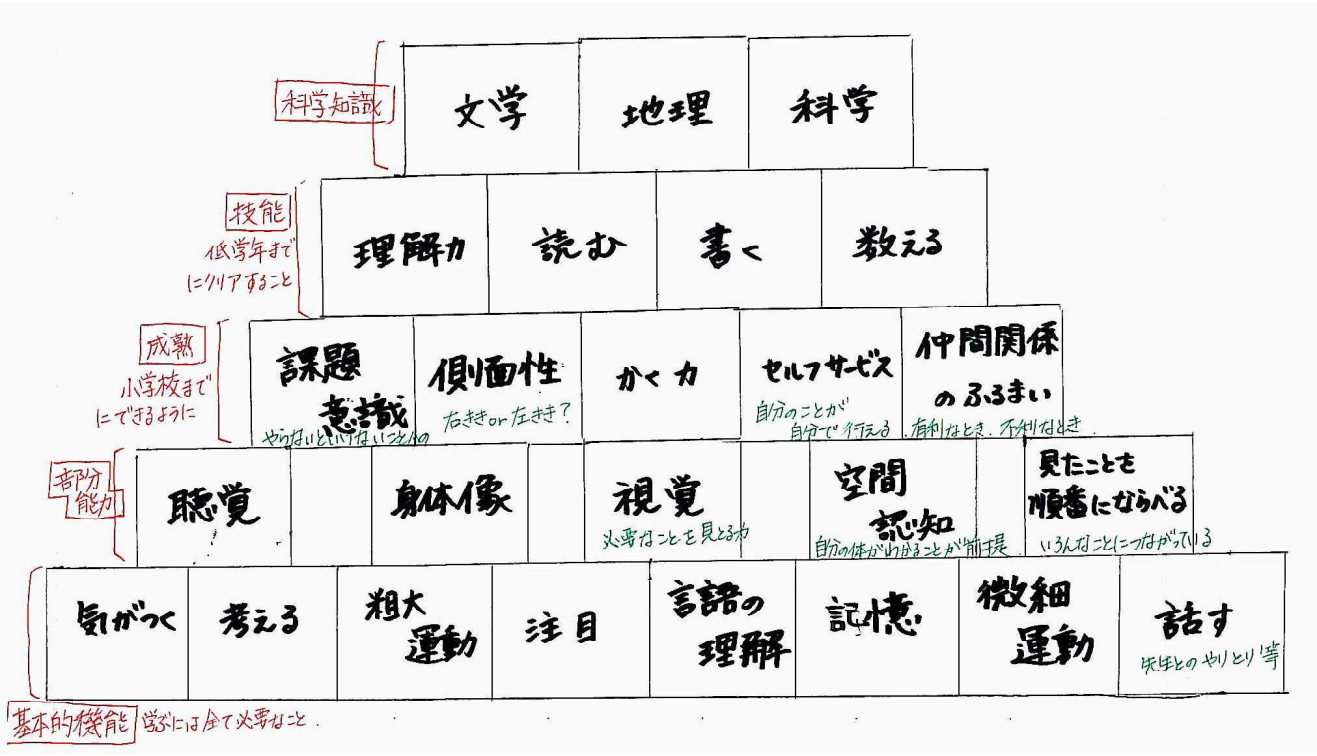
子どもと保育者、心と心で感じる・伝えることは、複雑なものではない。伝えたいと思うことを自分の頭の中で整理する。そうすると、シンプルな答えが出るように思う。ハンガリーの保育から、必要なことを必要応じて、無駄なく、適格な質の高い保育を学ぶことができた。子どもが何を求め、必要としているか、自分に何が出来るか、私自身もそれを見出す専門性を磨いていきたいと思う。

４　ハンガリーのマイバ保育園研修に参加して

身体運動について学んだこと

谷口　春菜　きりん組（３・４・５歳）担任

5 月 3 日から 10 日間、ハンガリーへ研修に行ってきました。そこではたくさんのことを学びました。
下の表は、子どもの**発達段階**です。



＊発達には順序があって、どれかが欠けたままだと発達する上でどこかに影響をあたえ、バランスが悪くなります。例えば、一番下の段の**運動**が、充分発達できていないと文字を書く時に力が入りにくくなり筆圧は弱く、しっかりとした線が引けません。つまり 3 段目にある書く力が発達しにくくなります。これらがしっかり発達できているかは、あそびを取り入れて確認していきます。

粗大運動・・・体全体の運動　　微細運動・・・手先の運動

発達させるには

赤ちゃんの頃の、手を見たり、動かすところから神経組織は発達していっています。神経組織を発達させるのには運動が必要です。体を動かすことで神経組織が繋がっていき、より複雑になり、考えるという力が付きます。その運動を八木保育園では**毎日体操**として行っています。

毎日体操

キリン歩き

走る

その名の通り、毎日行う体操です。一日の流れの中で、全員で 15 分程度おこないます。
最初に歩く・走るです。次第に負荷をかけていき、心拍数を上げていきます

オットセイ

バランス

次に運動練習です。体全体をバランス良く動かす事が出来るようにプログラムを作ります。見て真似るだけでなく、考えて動けるような言葉がけもしていきます。

ゲーム

次はゲームです。この日は「イヌつかまえ」というおにごっこをしました。子ども達はふつうに立って逃げますが、オニは両手をついたまま（ひざをつかない）で、みんなを追いかけます。さわられた子どもも両手をついてつかまえる側にまわります。　世界の子どもの遊戯集より
子ども達はこのあそびが大好きで、盛り上がりました。

そして最後は歩きです。心拍数を少しずつ下げていきます。

人間には 80 種類の動作があり、そのほとんどが 6 歳までに出来るようになります。この毎日体操では、さかあがりや、倒立などを教えたり、そのためにするものではありません。運動の基礎能力を育てるものです。

子供たちは体を動かすことが、大好きなので、体操は大好きです。体操といっても、子供にとってそれは遊びです。喜びや楽しさのあるものでなければいけません。しかし、大人は子供たちにどう成長してほしいか、ここを伸ばしたいというねらいは常に持っています。ねらいに沿った**課題遊び**を与えます。（**課題運動**とも呼びます。）この課題をクリアすることが学習に繋がっていくのです。子供は考えて初めて、思考が働きます。考えたことを表現し、成功感を感じられる場を大人が提供します。そこで経験したことを**自由遊び**の時間に活用できるようになれば、身についているし、自分で考えられているということです。（**自由運動**とも呼びます。）自信や自立にも繋がります。したがって、課題運動と自由運動はどちらもとても大切です。

後列　ｾｲｹ･ｲﾛﾅ園長、ﾌﾞｶﾞ･ｱﾝﾅ先生

ハンガリーでも八木保育園でも、この課題遊び・自由遊びの時間が、しっかり保障されているから、子供たちは考えることができ、自分の力でいきいきと生活することができているのだと思います。「**自然に身についていくと決して思ってはいけない**」私がハンガリーで衝撃を受けた言葉です。子供たちにとって、今必要なことを大人が見極め、ねらいに沿った遊び（時間・空間・道具）を提供していくことがどれほど大切であるか改めて考えるきっかけなりました。

《乳児編》

５　乳児保育から幼児保育への連携

山本真菜美　にじ組（１・２歳）担任

私は、今まで 0 歳児クラス 2 回、1 歳児 3 回、2 歳児 3 回担任してきた。その中で、2 歳児というのは、乳児期から幼児期への成長の時期という変化の著しい時であり、責任も大きく関わりが難しい。しかし、心と体が成長していくこども達と触れ合うのはおもしろく、新たな発見もあり、大変魅力のある時期だと私は感じる。

2 歳児を担任したのは全て本園である。恵まれたことに本園の乳児クラスの隣には、幼児クラスがあり、子ども達の環境の中に、幼児という存在はすぐ身近にある存在だった。2 歳児は、様々なものに興味、憧れをもつ。これは大切なことだ。そして、幼児への憧れは、大人が思っている以上にあるようで、よく見て、聞いて覚えている。壁の向こうから聞こえてくる声に「しー何か歌ってる」と一人の子が幼児の歌に気づくと、「ほんまや」と他の子も気づき、黙って壁に耳をつけ、幼児の歌を聴き始める。毎日毎日聴いてるうちに、子ども達は口ずさみ、しっかり音程も歌詞も覚えて歌っているではないか。2 歳児の吸収力のすごさに驚かされた程だ。

幼児クラスへ向けて子ども達に育児面において伝えてきたことは

・午睡ズボンへの移行
・手洗い、うがい　　・顔洗い
・5 ～ 6 での食事
・朝、夕の身支度　　など

最初 2 歳児をもった時、どうすればよいのか、しっかり教えなければ…と責任の重さにとまどい、伝えることに必死だった。そんなある日、ふと子ども達の遊びに目を止めたことがあった。今でもはっきり覚えている。

一人の男児が仕切り板やウレタン積み木で車を作り、その中に乗り込み「プールいってきまーす」と遊んでいた。その後プールについたようで、ウレタン積み木を壁によせ、そこからジャンプ。絨毯の上で泳ぎ始めた。「クロール！」と得意そうな顔。それを見ていた私も他の子達も大笑い。すると、部屋にいた担当児 7 人がみんな絨毯の上で楽しそうに泳ぎ始めた。そして、先程乗っていた車の後ろにウレタン積み木をくっつけ、8 人乗りのワゴン車をみんなで作り、車に乗り込んで買い物へ行こうとしていた。そこで「体、水で濡れてない？拭いてから行ったら？」と私が一言。「ほんまやー濡れるやん」と布を持ってきて、体を拭き始める。夏のプール時、上手に拭けるようになったので得意げに拭いている。拭き終わると買い物へ行き、ままごとコーナーで作る子、食べる子、犬になる子など別れて 8 人での再現遊びが続いた。

いつの間に、こんな遊びをするようになったの？おもしろすぎる、どこで覚えた？教えてもらった？と、素直に疑問に思った。

これは、子ども達が日々過ごす中で、家や保育園などで自然と身につけていったものだ。この遊びの中で、友達を認め、思いやり、助け合い、協力しあうことができているではないか。この姿を保育士が認め、見守り、援助していくことで、もっともっといろんなことができていくのではないか…と思うようになった。

それから私は、もっとゆったりした気持ちで子ども達と向き合い、成長に合わせて、幼児へ向けての準備

も始めていこうと変えた。そうすると、今まで必死に伝えていたのに、子ども達にスムーズに伝わり、簡単にできるようになっていった。また、“できた”という達成感を味わうと、少し難しいことでも、頑張ればできることにどんどん挑戦させてみた。子ども達は、生き生きとした表情になり、挑戦すること、頑張っている友達を応援することを楽しむようになった。

2 歳から 3 歳になり、心も体も成長いくが、まだまだ甘えたい時、寂しくて泣きたい時は当然ある。そんな時は、泣いたり甘えたり十分したらいいと思う。無理に我慢しなくてもいい。その子がふと笑った時、しっかりと目を合わせ、うなづいたり、笑いかけ、そっと寄り添えるよう心掛けている。喜怒哀楽、素直に表現するのが 2 歳児。だから、できない・分からないことは、正直に伝えたらいい。それができるような環境、保育士でありたい。

2 歳児で、友達と十分に遊び、楽しみ、喧嘩し、悔しい経験をすると、幼児クラスへ進級しても何も心配いらない。なぜなら、自分の周りには、助けてくれる友達がいる、一緒に遊ぶ友達がいる、分からないことは「分からない」と自分で言える…と経験したことが、自信につながっているからだ。

乳児期の遊びの経験が、幼児保育で大きく影響してくるだろう。

だからこそ私は、毎年、保育について、一人ひとりの関わりについて悩み、考え、試みながら、子ども達に合った関わり方を見つけている。

幼児職員とも常に、子どもやクラスの情報交換し、一緒になって保育してきた。そうすることで進級する前から一人ひとりのことを知ってもらえ、安心して引き継ぎもできた。

担任した子ども達が、幼児クラスへと憧れを持ち、生き生きとした姿で進級していき、「先生、元気？」と少しお兄さん・お姉さんな姿になって、乳児クラスを覗きに来てくれることが、何よりも嬉しい。

６　育児担当制・流れる日課に出会って

新居由希帆 そら組（１・２歳）担任

私は昨年の春、短期大学を卒業して、この八木保育園に就職しました。今年で 2 年目となります。短期大学に在学中、実習として様々な保育園へ行きました。ある保育園では 2 歳児 27 名を保育士 5 名（正規：二人、パート：三人）が担当をして生活していました。食事の時間になると、5 名の保育士と 27 名の子どもが 5 つのテーブルに分かれて一斉に食事をします。日によって一緒に食べる先生やお友達は異なり、テーブルもその日次第で変わっていました。当然子どもたちはその日どこで誰と食べるかは知らず、食事が始まるときに自分のコップを目印に、そのコップが置いてあるテーブルを探し食事をしていました。また排泄は、決められた“排泄の時間”に一人の保育士が全員のズボンやパンツを脱がせて、順番に排泄をし、別の保育士がズボンとパンツを履かせる、また別の保育士が手洗いを見て援助します。子どもたちはズボンを脱いでから、便座やおまるが空くまで座って待ち、自分の番が来ると排泄をします。

初めて耳にした「流れる日課」。

八木保育園に就職した１年目。大学の講義や実習では聞いたこともない言葉で、どんなことをするのか戸惑いました。実際に先輩の先生方と相談し日課を組み立て生活しました。その中で感じたことは、子どもが待つということが極端に少ないということです。例えば、排泄は好きな遊びをしている子どもを一人ずつ担当が誘い、1 対 1 でおむつ交換をします。（それも毎日同じ保育士が行い、他の育児もすべてその保育士が援助します。）一人目の排泄が終わると、その子どもはまた遊びに戻ります。その後、また別の担当児を排泄に誘いオムツ交換をし、遊びに戻します。つまり大人にとって順番に排泄をしていますが、子ども一人ひとりにとっては順番を待つ時間はなく、自分と担当の保育士と１対１で関わることができます。この日課を毎日過ごしていく中で、子どもたちは自然と「〇〇ちゃんが終わったから、次は僕（私）の番」というふうに、予測をし、自分から片づけを始める等、自主的に能動化していきます。

育児担当制によって、毎日同じ保育士と同じ流れの同じ育児をするということは、子どもたちにとって、とても予測しやすい安定した生活になることを知りました。例えば、同じテーブルで食事をする１歳児２名は、個々の排泄が終わった後自分で決まった席につき自分でエプロンをつけたり、タオルで口を拭いたり身支度をします。そして食べ終わると決まった場所にある籠をとり、決まったところに敷いてあるコットへ向かいます。これは入園してきた４月から同じ一連の流れを繰り返していたため身についていると思います。もしも毎日食べる場所や寝る場所が変わると、予測して自ら席に付いたり、コットへ向かったりするでしょうか。毎日自分の居場所を探して生活することになるのではないでしょうか。

信頼関係を築く育児担当制

担当児の日々の育児を通して、子ども一人ひとりの性格や発達段階をじっくり見つめることができます。私は、昨年度から担当している子どもを今年度も引き継いで担当しています。昨年度はつたい歩きをしていた子どもたちが、次第に一人で歩くことができるようになり、今では走ったり、跳んだり著しく成長し、その時どきを近くで見ることができます。身体的な発達だけではなく、精神的・社会的な発達も見つめることができます。昨年度は保育士と１対１で関わることがほとんどだった子どもが、次第に大人を通じて他児に興味を持ち、今では子ども同士で名前を呼び合ったり、優しく頭を撫でたりしています。一人ひとりとゆっくりと密に関わる機会があったからこそ、細かな成長や発達に気づくことができるのだと思います。

決まった子どもの育児を担当するということは、信頼関係を築く大切な機会だと思います。まだ気持ちを言葉で表現できない子どもでも、私が排泄の後に「きれいになって気持ち良いね。」と笑顔でそっと声をかける。その一言で、子どもと目が合い、快を共有しコミュニケーションが取れる。こういった快・不快から喜び、悲しみ、驚き、楽しさ、不思議など様々な感情を代弁し共有していくことで、信頼関係が築いていくと思います。

この八木保育園に就職してまだ２年足らずですが、子どもたちが安心して生活できるこの流れる日課のもとで、子どもたちの発達を直に見つめることができてうれしく思います。
この環境を活かして一人ひとりを尊重して生活できるよう努めていきたいと思います。

７　乳児　情緒の発達

高井美保子　　ゆめ組（０・１歳）担任

保育指針第２章子どもの発達１－（１）には、『子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、人への信頼感が育つ。』　１―（３）には『子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。』とある。

人間（１）[1] 人間は、どこかで全面的に受容される時期があればあるほど、安心して自立していける。自分が全面的に受容されるということは、ありのままの自分を承認されるということで、子どもにとっては、このままでいいのだという安心感、すなわち、自信になる。人生のできるだけ早い時期に、この安心感が与えられることが大事だ。自分を認めてくれる人があるということは、その人をそれだけ大きく信頼することであり、その人を基準にして、そのほかのいろんな人を信頼していけることになる。人に対する信頼感が、自分自身に対する自信につながる。乳児期には、人を信頼する感情がもっともよく育つ。

参考文献　（１）佐々木正美　『子どもへのまなざし』（福音館書店）

私が新しい子ども達と保育園で生活するにあたり一番大事にしていることは、子どもとの信頼関係である。まず子どもにとって安心できる人と思ってもらえることがなによりである。

大好きなお母さん、お父さんから離れて知らない場所、知らない人に保育されるのは、とても不安であり怖く、泣くのは当たり前である。そのような不安な気持ちをどう解消し、信頼を築いていくか。まずは子どもの気持ちに共感し言葉で代弁する。「お母さんと一緒がいいよね」「お母さんが大好きやもんね」と抱っこをしたり頭をなでたりスキンシップをとりながら少しずつ落ち着けるようにする。また何に興味があるか探りながら遊びに誘う。少しでも家庭と同じように安心して過ごせるようにと思いながらコミュニケーションをとっている。

排泄の時はチャンスである。１対１でおむつ交換するのでコミュニケーションがとりやすく、その子ども自身をよく見ることができる。当然、初めは泣いて嫌がるが、一連の作業のようにおむつ交換をするのではなく嫌な気持ちに共感しながらも、「ズボン脱ぐよ」「おしりあげるよ」「気持ちよくなったね」などと声をかけながらする。言葉は分からなくても、やさしいまなざしで言葉をかけてもらうことの快感は小さくても十分に感じている。

心地よい快感の積み重ねがあって、子どもの気持ちも不安から安心に変わり、徐々に信頼関係ができるのが分かる。またすることを言葉で伝えると、やがて言葉と行動のつながりを理解できるようになって、子どもがその行為に応じてくれるようになる。足をあげてくれたり、おしりをあげてくれたりする。言葉を話せなくても言っていることが分かり、協力してくれるようになる。

安心感がでてくると少しずつ私から離れて遊び出すが、子どもは私の姿や動きを目で追ったり、

確かめたりする。一人で遊びだしたからよかったではなく、子どもが私を見るように、一人一人が何に興味があるのか、どうしようとしているかと観察し見守ることを心がけている。例えば、チェーンや積み木をうまく容器に落とせた、一人で立てたなど嬉しいとき、私の方を振り返る。また困ったとき、不安なとき、

何かを発見したときなども振り返る。私の視線を期待している。その瞬間を見逃さず、子どもの気持ちを言葉と表情で共感したり、分かち合ったりすることを大事にしている。必要なときには手を差しのべて子どもが満足できるようにする。そういう繰り返しが子どもの情緒の安定をはかり、信頼を深め、よいコミュニケーションを築いていける。これは家庭においても同じことがいえると思う。

分園で乳児期を過ごした子ども達が、本園へ進級し、異年齢の中で、初めは年長児の先輩にいろいろなことを教わりながら過ごし、そして年中・年長児になれば顔つきも変わり、自信を持って過ごしている。小さい子を手伝ったり、いろいろなことに友達と一緒に考え、協力して取り組んだりする姿を見ると嬉しく思う。

先に述べた保育指針や参考文献より、乳児期の共感、受容経験はその後の自主性や社会性にも大きく影響していくのではないか。人を信頼するということが育っていれば、安心して様々なことに挑戦したり、友達のことを受容したり、またトラブルが起こったときには葛藤しながらも自分で考え、解決し、子供同士で育ち合うことができるようになっていくのだと思う。そのような成長の見通しを持って、乳児の大切な時期を子どもの感情、子どもの気持ちを大切に保育していきたい。

８　おむつ　布への移行

三木幸子　　ゆめ組（０・１歳）　担任

乳児院での経験

私が保育士となり初めて勤めた乳児院では、布おむつを使用し、施設内には大きな洗濯室があり、そこで毎日職員が交代で子ども 20 名～ 30 名の服やおむつを洗濯していました。それはとても大変な業務で、次々と運ばれてくるおむつを１つ１つ手洗いし、その後、洗濯機で洗い、屋上の物干しへ持って上がり、干す。これを何度も繰り返し行う重労働でした。

１人の看護士が、そこまで大変な思いをしてまでどうして布おむつにこだわるのか・・・。紙おむつはそんなにいけないものなのか…と疑問を持ち、院長に、紙おむつと布おむつが、それぞれ子どもの成長にどんな影響をおよぼすのか、実験してみたいと提案しました。そして、当時私が担当していた子どもを紙おむつで育てて、肌への影響、排泄の自立について…など様々なデータをとってみようということになりました。しかし紙おむつに変更してすぐにお尻が赤くただれてきました。布おむつの時にはなったことがなかったのですが、肌がデリケートで紙おむつが肌に合わなかったのだろうと思いました。そして、病院で薬をもらったのですがなかなか治らず、これ以上、子どもに負担はかけられないと、実験は中止となりました。

この子どもは、紙おむつの素材が肌に合わなかったのでしょう。紙おむつは”紙”ではなく、石油からできたポリエステルなどの不織布で、高分子吸収材を包んだもの…。おしっこはしっかりと吸収してくれますが、気密性が高く、湿気がこもります。そう考えると、子どもにとっていいものなのかと考えさせられました。　※紙おむつのすべてを否定するわけではありません。

我が子の子育て

乳児院の経験から、我が子の子育てには布おむつを使おうと決めていました。（もちろん、遠方への外出などは紙おむつを使用していました。）私は２人の子どものおむつがとれるまで（下の子が２歳になるまで）は仕事をしていなかったので、できたのかもしれませんが、それほど大変なことだと感じませんでした。子どもが泣くとま

ず、「おしっこが出たのかな？」とおむつ交換をしました。１日何度もこれを繰り返しているうちに、泣き方でおしっこが出たのか、お腹がすいたのか…と子どものことが分かってくるようになり、少しづつ母親になっていけたような気がします。
子どもが大きくなれば”早く遊びたい”と動き回るようになり、おむつ交換も大変になりましたが、歌を歌ったり、”イナイ　イナイ　バァー”をしたりとあやしながら交換をしていました。今となれば、この時間は子どもとのコミュニケーションをとる大切な時間であったなと…と思います。

パンツ式おむつからテープ式のおむつへ

我が子の子育てに奮闘して十数年、もう一度保育士の仕事を始めると、紙おむつの改良がすすみ、紙おむつ、そして小さな子（歩けない子）までがパンツ式のおむつをはいていました。最近の子は排泄の自立が遅いな…と感じてはいましたが、紙おむつも肌に優しくなって、子どもへの負担も減ったのだろうと、特に疑問に思わず、毎日紙おむつ（パンツ式）の交換をしていました。

園生活の中で１日数回排泄の援助をするのですが、1 人で歩けるようになった子どもはパンツ式のおむつの着脱が 1 人でできるようにと、練習をさせていました。排泄の時間は、おむつを取り替えて清潔にする時間というだけでなく、ズボンやパンツの着脱の練習も加わり、”排泄の自立を促す”ことより、”着脱の自立”に重きをおいていたように思います。トイレでの排尿があった時には共に喜び合ったのですが、パンツやズボンの着脱をしている時間の方が長く、子どもにはストレスになっていたのではないかと、今、振り返ると、そう思えてなりません。

2012 年 4 月より園ではおむつをパンツ式からテープ式に変更となり、それと同時に立式おむつ交換台が設置されました。初めはテープ式になることに不安がありました。今までパンツ式のおむつをしていた子ども達がどんな反応をするのだろうか。特に２歳児はテープ式になることで、着脱の面での成長が遅れるのではないだろうか…。赤ちゃんのようだと嫌がらないだろうか…と。

でもその不安はすぐになくなりました。初めは寝転がって交換することを嫌がっていた子、はずかしがっていた子も、だんだんと、排泄の時間は必ず保育士と１対１となり、目と目を合わせて、肌を触れ合わす、とても楽しみな時間となりました。また、保育士は子どもの体の様子（傷・発疹など）を注意深く観察できるようになり、病気を早期に発見できるなどの良い時間ともなりました。保育士にとって排泄の時間が、子どもに何かを要求してその結果を求めることなく、濡れたおむつを交換して快適な気分になり、子どもとのコミュニケーションをとれるスペシャルな時間となりました

布おむつへの移行

2013 年 4 月、布おむつの使用が始まりました。話しのできる子どもの中には、布おむつの感触を布パンツだと思い、「お姉ちゃんパンツみたい」と喜んだり、今まで排尿が出たことを報告できなかった子が「おしっこでた」と濡れた感覚が分かるようになりました。また、お母さんやお父さんに登園時おむつ交換をしていただくことになりました。保護者の方にとってはとても手間な時間だと思いました。でもそれまでは検温のみで、ひざに座らせ計り終えると、ボードに記入して仕事に向かわれる…。というのが、登園時の様子でしたが、今では検温し、おむつを交換しながら目と目を合わせてお話をしたり、歌を歌ったりとあや

し、終わると、子どもの方を見て、「いってきます」と仕事に向かわれるという、風に変わっていきました。おむつを交換する２～３分の短い時間ですが、親子の密な時間だというのが実感できました。朝の”手間”な時間は、子どもにとっては「快適な時間」…幸せな時間だと感じたのです。

布おむつへと移行したことで、おむつの交換頻度は高く、保育士には負担も増えました。でも、朝のお父さん、お母さんと同じで、その負担は子どもにとっては保育士と密な時間を過ごせて”清潔”になる。「快適な時間」だと思うと、幸せな気持ちになります。これからもこのスペシャルな時間を大切に毎日の保育をしていきたいと思います。

９　子どもの遊び、発達

斉田朋子　　うさぎ組（１・２歳）担任

八木保育園の子どもは、毎日自分たちの好きな遊びを十分に楽しめる。0 歳児から、就学前の子どもにとって遊びが一番大切である。そのため、道具の種類もたくさん必要である。機能的な物（手・指の発達・脳に刺激する物まで）・再現が出来る物（人形の世話・台所・ドレッサーなど）・運動発達を促す物（ボール・ウレタン積み木・リングなど）。発達に応じて、遊具を整える・提供することが、私たち保育士の役目である。

コダーイ保育を導入していないいわゆる、一斉保育のＡ保育園に通うＢ子（2歳７ヶ月児）。この保育園には、八木保育園のように発達を促すような遊具が少なく、遊具も家庭で使うような、キャラクター物を目にする。布や人形はあるが、微細運動を促すような遊具がない。Ｂ子がチェーン落としを出来るようになったのが２歳の頃であった。それに比べ、八木保育園の子どもは０歳児のクラスから、チェーンや落とし用の筒やタッパーが置いてある。最初は、ただ触る、なめるなどのいじり遊びから始まる、そして入れたり、出したりの練習遊びへと変化していく。八木保育園の子どもはだいたい（個人差はあるが）１歳頃から出来るようになる。この発達の違いに愕然とさせられる。子どもの発達がいかに、環境や遊具によっていかに促されるかと証明している。

私が２歳児を担当していた時のこと。子どもたちが積み木を使って、積み上げたり、横にどんどん並べていく時期があった。現在の積み木の量だけでは、十分でないと感じ、量を増やし、別の種類の積み木も用意した。また、積み木は箱にきれいに入っていて、子どもでは出したり、片付けることは、難しいと感じ、大きなバスケットに入れて置いた。もちろん、遊びの空間も広くした。すると、３～４名の子どもたちが、スカイツリーや、新幹線、など次々と見立ててつくるようになった。ただ、ひたすら並べて、部屋を一杯にしている子もいた。そのうち積み木だけでなく、チェーン・リング・おはじきなども一緒に並べていく。そしてそれらを、そのまま飾る。幼児のように、続きをするのではないかと期待して。最初は１週間そのままただ、飾っているだけだったのが２ヶ月、３ヶ月続けていくうちに、少しずつ、手を加え、積み木で作った家にフィルムケース人形のお客が並べられたり、布の布団に寝かしたり。ひたすら、熱心に取り組む姿に私は毎日ワクワクしていた。

子どもは道具があれば遊ぶ。子どもの自発的な遊びの行為により毎日の発達につながっていく。Ａ保育園では発表会があり、２歳児未満の子どもでも保護者など大勢のお客の前の舞台に立つ。子どもによっては平常心を保ち、にこやかに楽器遊びや、歌の披露、そして簡単な表現遊びが出来るのかもしれない。でも、緊張し、不安で、怖くてどうしようもない子どもにとってはどうだろう。私は苦痛でしかないと思う。

以前勤務していた保育園では、４歳児を担任していた。発表会での合奏を子どもに指導していた。合奏が完成し、子どもと喜び、達成感で一杯だった事が今でも忘れられず、深く私の心に残っています。今思うと、それは大人の自己満足でしかなかったと感じるようになった。だからこそ、そういった経験よりも、安心出来る担任保育士と毎日を過ごす、保育室で遊び、生活するということのほうが、大切なのでは、と思う。

保育所保育指針の第３章の保育の内容から環境について、＜周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う＞とある。

ねらいより①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。

②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

近年、子どもは自然と触れ合う体験をする機会が少なくなっている。私は子どもには出来るだけ小さな頃から、自然と触れあい遊んでほしいと思う。大人になると、様々な感情がでてくるが子どもは好奇心が旺盛である。いろんな虫や小動物を怖いと思わず、触って感じてほしい。そこから、命の尊さを学んで欲しい。少々の雨なら、カッパを着て出かけてみたい。小学生が外で遊んでいるのを見たことがある。折角の晴天なのに、４～５人全員がゲーム機を持ち必死にプレイしている。会話は少ない。今の現実を見て、子どもの将来に危険を感じた瞬間だった。空をみて、夕日や、雷の稲光を見て、どんな気持ちになるのだろうか。

保育園には裏山があり、毎日数種類の虫を目にする。子どもたちがそれを見つけ、さわり、何の虫かなと図鑑を広げる。園庭に大きなとちの木があり、暑くなると、子どもたちが日陰を求めてやってくる。これぞ、自然と共存している姿なのだと思う。

保育室での自発的な遊びは大切である。それと同時に自然との関わり、遊びを広げていけるようにすることがこれからの私の課題である。

１０　新入所児の なかよし保育　久保田美幸　うさぎ組（１・２歳）担任

八木保育園では、２月末、入園説明会で面接をして用品等の説明をした後４月に入園式をします。入園式が終わるとすぐ入園です。お母さんは、…泣かずにいってくれるかしら？　先生になついてくれるかしら？　ごはんは、ちゃんと食べられるかしら？お友達となかよくできるかしら？・・・と様々な不安を持っておられると思います。

子どもの方は、もっと大変です。「この人といれば大丈夫」と思っていたお母さんに知らないところに

連れて行かれ、知らない人に預けられる。それは、私たち大人が、知らない外国に一人で置いて行かれるのと似ています。言葉も解らない、食べるものも違う、においも、環境も、知っている人が誰もいない。そんな所では、不安で遊ぶことも食べることも眠ることも出来ないと思います。どうしたらいいのか解らないと思います。

「慣らし保育」から「なかよし保育へ」

子どもやお母さんのそんな不安を少しでも軽く出来る様に八木保育園では、「なかよし保育」をしています。始めは、「慣らし保育」と言っていましたが職員の話し合いで「なかよし保育」という名前に変えました。子どもを園に「慣らす」のではなく、子どもが園とクラスと遊具と保育士と友達と「なかよし」になる。お母さんと保育士が「なかよし」になる。そんな思いが込められています。

日程などの組み方

面接の際、個別になかよし保育に協力して頂けるかと可能な日程を伺います。望ましいのは、２週間ですがそれほどの期間とれない方には、個別の日程を組むようにしています。

日程は、１．２歳児の一クラスに１２人子どもがいたとして担任は、２人。半分の６人が新入園児だとします。半分の６人の在園児の保育は、通常保育です。在園児にも新しいお友達とそのお母さんが来ることを事前に伝えます。初日、半分の在園児を Ａ 保育士が見ているときＢ保育士が８時半から３０分①児のなかよし保育を１対１でするようにしています。なかよし保育は、必ず１対１でします。時間は、少しずつ伸ばします。

そうすることで個別に色々その子どもの事を聞いたりその子どもにアイコンタクトを送ったりできるからです。そうやって一人ずつ３０分②児③児となかよし保育をして９時半にＡ保育士と交代します。

まず遊べるように

今度は、Ａ保育士の担当の新入園児が３０分ずつ１１時までなかよし保育をします。初日の３０分は、戸外遊びが多いです。戸外遊びだと子どもが安心して遊具に触れて遊びやすいことが多いからです。子どもが遊んでいるときにお母さんから子どもの遊び、食事、排泄等々あらゆることを伺います。そして子どもの遊びの様子、在園児も遊んでいるので在園児との関わりをお母さんも見る事が出来ます。また園の事、遊具の事、大切にしていることもその時々に応じてお伝えします。

室内も同じで室内で遊びながらその子の様子を見ながらお母さんから伺いこちらからもお伝えします。こうやって少しずつお互いに情報を増やしながら保育のパートナーとして親睦を深めて行きます。

子どもも毎日少しずつ行く公園のような場所になかよしになり保育士にも、お母さんでもおばあちゃんでもないけれど毎日会う誰か。お母さんと毎日なかよく話をしている人として、少しずつ信頼関係を結んでいきます。

食事は段階を踏んで

なかよし保育の日課(スケジュール)は、必ず今、いる子たち(在園児)の日課に合わせてお母さんから得た情報を元に担当が組んでいきます。①ちゃんが早く起きて登園してくる子だったら早くお腹が空くので早いチームの子ども達と食事が出来る様に組みます。そして５日目くらいのなかよし保育の時に食事も体験して頂きます。

食事の初めは、お母さんに食べさせて頂きます。その様子を見せて頂いて、食べさせ方等の情報を保育士は、取り入れます。お母さんは、どの時間にどんな子たちとどこでどんなものをどんな食器で食べているのかを知る事が出来ます。その時に保育士は、なぜこの食器を使っているか、

どんなことに気を付けて食事をつくっているか等の事も折に触れお伝えします。お母さんの中には、「すごく考えられているんですね。」と食器を購入された方もおられます。子どもは、お母さんが食べさせてくれるので安心して口に入れます。新しい味かもしれません。一緒に食べる友達もわかります。いつもの誰か(保育士)もいます。だんだんお母さんがいない時はこの人といればいいんだな、とわかってきます。

心地よく睡眠できるように

そうやって三日ほど食事をして今度は、睡眠も増えます。子どもにとって（特に小さい子ども）違う場所で眠ることは、とても困難なことのようです。

当園では、コット（床から１５センチ離して振動を軽減し埃を出来るだけ吸わないようにする）を取り入れています。なかなか入眠初日にコットで眠れる子どもは、少ないです。それでもここでもお母さんに寝かせて頂くのでお母さんとの関わり方、寝かせ方、抱き方など保育士への情報は、多いです。お母さんも誰の横でどんな所で眠るのか。暗さは、音は、子どもにとって困ることがあればその時に伝えて頂ければいいのです。「せんせ、この子、タオルを持って寝るんです。」「持ってきていただいていいですよ」・・・遊びと食事と睡眠を十分体験していよいよ半日一人で過ごす日が来ます。１３日目くらいです。（子供さんの様子に合わせて延ばしたり短くしたりします。）その日、保育士は、必ずその子に注目して過ごせるように職員体制をとります。そしてお母さんにも一つのお願いをします。それは、朝、子どもから離れるときに遊んでいるからとこっそり行かないでほしい事です。

園生活への緩やかなスロープ

必ず「お母さんは、お仕事に行ってくるね。お昼に帰ってくるからそれまでは、A 先生といてね。」とお話ししていってほしいことをお願いします。それは、子どもは、小さくても話せばわかる一人の人だからです。その時は、少しは、泣くかもしれないけれど振り返れば１３日間の中で仲良くなったものばかりの中にいます。いつもいた誰かの腕に抱かれています。お母さんと別れた後子どもは、お母さんを見送り遊び始めます。お母さんも離れるときは、泣かれてつらいけれど１３日間の中でこの後、我が子がどこで誰とどうやって過ごすのか手に取るようにわかります。子どもたちの名前も覚えてしまっているお母さんもいます。お昼ご飯を食べたころお迎えに来て一人で過ごせたことを大いに褒めます。そして次の日からは、お昼寝もします。５月になかよし保育をしたこの写真の子どもさんは、この日に初めてコットで入眠出来ました。お迎えに来られて報告するとおかあさんが「感動しますね」と涙ぐんでおられました。

なかよし保育は、子どもにもお母さんにも保育者にも大切な期間だと思います。園生活の中に自然に子どもたちを誘う緩やかなスロープ。気が付いたらもうその中にいる。そんな緩やかな関わりの中で子どもたちを保護者の皆さんと一緒に育んでいきたいと思っています。

ふなのこは、かわに
どじょうのこは、どろに
おいらは、かあさんのふところに　　（ごろあわせ　　わらべうたで遊ぼう０１２歳児編より）

１１　乳児保育　補助保育士として

三木照代　うさぎ組（１・２歳）

私は、八木保育園分園で５年、本園で２年八木保育園で担任の先生方、子ども達とともに非常勤保育士として保育補助の仕事をさせていただいています。
担任と子ども達が毎日流れる日課のもと､安心に過ごす為に育児・あそび・環境を援助するのが仕事です。

＜補助の内容＞

育児　・おやつ　給食の運搬・準備・片付け　・戸外あそび時の退室・入室を担任と共に援助
　　・コット　布団敷　等
あそび　・順番に朝のおやつ・給食時の部屋あそびの子ども達のあそびの援助
　　・順番に戸外あそび時の退室・入室時の戸外あそび、部屋あそびの子ども達のあそびの援助
環境　・おもちゃづくり　・室内・戸外（園庭）の環境整備　・故障、破損したおもちゃの修繕　等

７年前、八木保育園分園にはじめて働かせていただいた日、園庭で落ち着いた雰囲気の中で、タイヤ・牛乳ケースを、２歳児の子ども達が話し合ったり、考えたりして高く積み上げたり、並べたりして、ごっこあそびをしたり（お店屋さん)、粗大あそびをしたり（ケースの上を歩く、跳ぶ、押す）する姿を目にしました。０歳児の部屋では、一つの部屋で食事する子ども、あそぶ子ども、睡眠する子どもが区切られる事なく、落ち着いた雰囲気の中でどの子ども達も安心して過ごしている姿がありました。
また、２年前本園にはじめて働かせていただいた日。幼児クラスが３歳児、４歳児、５歳児が年齢の枠もなく、それぞれが経験してきた事、成長してきた事、培ってきた事をもとに、あそび・生活を工夫したり、感じあったり、話しあったりしながら過ごしている姿がありました。乳児も幼児も担任を信頼し、安心している子どもの眼差しがあり、子どもの目・動き・気持ちを常に敏感に感じながら、保育する担任の眼差しがありました。

＜流れる日課＞＜異年齢混合保育＞に出会えた喜びと感動

それまで私は、保育士が中心となってあそび、生活をつくっていた保育をしていました。保育士が決めた生活・あそび・時間の中でどうしたら子ども達が落ち着いて安心にすごせるかと考えていました。しかし、慌ただしい毎日を過ごす事が多く、私も子ども達もお互いに落ち着いて安心して過ごす事はできませんでした。
八木保育園は個々の家庭生活・育ち・気持ちを配慮しながら子ども、親と共に、あそび・生活をつくっていく保育なので、個々の姿にあった日課がつくられ、子ども達も担任も落ち着いた雰囲気の中で安心して八木保育園で過ごす事を楽しんでいる保育に感動しました。あの日の事を、今でも私は忘れません。
担任と子ども達がコミュニケーションしたり､落ち着いた雰囲気の中で食事・排泄（幼児の場合は生活）あそびを協同しあい、感じあって安心して日々園生活を過ごして欲しいと思っています。

＜その為に、補助として私は＞

・担任の動き、気持ち、子ども達の動き、気持ちに常に目を配り、感じる事
・笑顔を心がけて、担任・子ども達と言葉、目線でコミュニケーションを図る事を心がけていきたいと思

っています。

今、心がけたいと思っている事は
・担任が集中して担当児の育児、あそびに子ども達が安心して生活したり、あそんだりできる様→空間・環境を工夫していきたい
・個々の発達　静・動の動きに合わせてあそびを援助していきたい
と思っていますが、具体的にはどうしたらいいのか？試行錯誤する時があります。その時に、園長、副園長・担任の先生方から「子どもにとって何をどう助けていくのか、職員と同じように知識と技術を身につけ、共通意識と共にパートナーシップを持つ事。常に協同する事、感じあう事、雰囲気づくりを心がける事」と教わりました。

これを日々の保育の中で実践できるように、専門書や様々な本を読んだり、わらべうた、保育についての研修をうけたりして日々精進していきたい。

・わらべうたで遊んでいる時の子どもの幸せな表情。・ひとりひとり布おむつを担任に替えてもらっている時の子どものうれしそうな瞳　・コットに布団を敷いている私に「ありがとう」と心から感謝の言葉を伝える子どもの澄んだ心。

日々健やかに成長している子ども達の為に「補助」の役割に責任を持ち、担任と共に、ひとりの職員として子ども達の日々の生活を大切に守っていきたい、と思っています。

＜参考＞**2012 年** 発行　**八木保育園の考え方と実践**　もくじ　　2012 年 7 月 3 日 改訂

未来を創る　園長　清流祐昭　1

八木保育園の保育

1　**保育環境とは・・・？**　時間・空間　ぞう組（３・４・５歳）担任　濱中智華　2

2　**幼児にとって遊びとは**　ぞう組（３・４・５歳）担任　山本英津子　3

3　**異年齢混合保育の３年間**　きりん組（３・４・５歳）担任　田中綾子　5

4　**異年齢混合保育の魅力**　副園長　清流綾乃　6

5　**乳児の生活**　育児担当制・流れる日課　ゆめ組（０・１歳）担任　高井美保子　7

6　**わらべうた**　うさぎ組（１・２歳）担任　久保田美幸　8

7　**八木保育園の給食について**　調理師　南　千秋　10

8　**八木保育園に６年間お世話になって**　卒園児保護者　浦　篤志　10

１２　八木保育園の給食と調理

調理師　　南千秋・吉岡晶子

市の献立を基本に、園独自の献立もいくつか作り、おやつも出来るだけ手作りの物を提供しています。また月に一回ご飯献立の日を設けています。

食生活は育児の原点。体を作るとても大切な時期だからこそ、健康な食生活の為に、食材を吟味し、魚や肉、野菜・調味料などこだわっています。

母乳を吸う＝「飲む」という行動は、人間にとって本能的な行為ですが、離乳期に初めて発生する「食べる」と言う行為は、本能では無く学習です。八木保育園では分園０歳児の離乳初期食から乳児・幼児食まで幅広い年齢層に対応した給食を提供しています。離乳食から幼児食まで全ての年齢において、次の事を心掛けています。

○しっかりと出汁を取り、旨味を活かす。

朝、最初の調理は出汁を取る事から始まります。出汁（だし）をしっかり取っているので、給食では砂糖を使いません。塩や醤油は少しの量だけ使用していますが、出汁（だし）を取る事で、塩分を控える事が出来ます。２歳前後で大人と同じ腎機能になるといわれているので、それまでの間は特に薄味を心がけています。

子供の舌は感覚器官である味蕾の細胞数が多く舌全体にあり、大人の２倍から３倍、味覚に対して敏感な為、濃い味付けは避けています。素材本来の旨味を味わえるよう、少量の塩醤油で味付けする事により、野菜の持つ自然の甘みを十分に感じる事が出来ます。

勿論、砂糖は脳にとって重要なエネルギー源なので、手作りおやつ等で糖分を適度に補給しています。

五味の内、甘味と塩味は本能的な物ですが、学習によって習得する旨味、酸味、苦みの内、酸味については、幼児食では大人と同じように酢の物で慣れ親しむ様に心掛けています。乳児食においては幼児食の三分の一から半分程度の酸味にしています。

乳幼児期は、初めて食べる食材や料理など、子供達にとって戸惑う事も多く、献立は家庭的でオーソドックスなメニューを中心に、時折、園独自の新しい献立も盛り込んで、子供達の負担にならない程度に、様々な食事を提供しています。

○新鮮な食材、旬の野菜を使う。

食材は八百屋と近郊の有機農園から無農薬の野菜を購入し、出来る限り新鮮な物、旬の物、有機野菜など、季節感を大切に地産地消を心掛けています。

幼児クラスにおいては、園庭でのプランター栽培やクッキングなどを通じ、食材や調理方法を知る事で、食に対する興味や意欲に繋がるよう、保育士が日々努力しています。給食職員も保育士と協力しながら食育に努めています。

子供達は、肉料理や揚げ物など、タンパク質や炭水化物を好む傾向が強く、甘味が薄く苦みの強い野菜は、低カロリーで消化に時間が掛かる為、あまり好みません。高カロリー、高エネルギーな食事の方が、生命維持においては合理的だからです。しかし飽食の時代において、本能のままに食事をする事は、生活習慣病などの観点からも好ましいとは言えず、まして劇的に成長する乳幼児期においては、バランスの良い食事は重要です。彩りの美しい野菜を使用したり、お肉と一緒に柔らかく調理する事で、乳児食では「野菜を食べてみよう」と思える様に、幼児食においては、子供達が「野菜を食べられた！」と自信を持ってもらえるよう心掛けています。

○クラスごとに食事の時間が違っても、それぞれ温かい物を提供する。

幼児と乳児では食事の時間が異なりますが、冷たい物は冷たく、温かい物は温かく、子供達の食事時間に合わせて、設備上可能な限り、出来たての料理を提供できるよう、努力しています。

○衛生面では、食材をしっかり洗い、清潔に扱う。

食中毒等の無いよう、加熱温度を守り、衛生に細心の注意を払って、調理業務に従事しています。幼い子供達の大切な給食を担う責任を心にとめ、毎日安全な給食を作ります。

○子ども達が飲むお茶や、調理に使用する水は、浄水器の水を使用しています。

個人差で好き嫌いも全く無い訳ではありませんが、薄味に慣れた子ども達は、マヨネーズやケチャップが無くても、かるく塩茹でしたボイル野菜などもしっかり食べられる様になりました。

園庭や畑の野菜作りから収穫できた野菜を「給食に使って下さい！」と子ども達が給食室まで届けに来てくれます。自分達の育て収穫した野菜が、どんな風に調理されるか、とても楽しみにしてくれる子ども達。出来る限り偏食を無くし、生きる力の根源である食事により深く興味を持ってもらえるよう、また子ども達が成長した後に、幅広い食文化を受け入れられる基礎を、各家庭と給食室で担っていきたいと考えています。

園舎　移転新築　　２０１４年４月　オープン

用地　　姫路市木場前中町４６番　　三つ橋公園の南西 70 m
1342 ㎡（約 406 坪）　東西約 60 m　南北約 25 m
園舎　　木造、瓦葺き　二階建て　　建築面積 438 ㎡　延床面積　約 880 ㎡

一階部（東から　玄関、階段、事務室、乳児保育室×３、調理室）
二階部（東から　階段、園長室、多目的室、幼児保育室×２）
一階二階ともに北側廊下・南側テラスで各部屋が連絡
収容予定人数　　乳幼児　最大 110 名　　職員 13 名

《 2012年八木保育園の考え方と実践より再掲載》

１３　八木保育園に６年間お世話になって

卒園児保護者　浦篤志

「ついに卒園なんだなあ」
息子、駿太朗が０歳の時から６年間通った八木保育園を卒園する日。卒園式に向かう真新しい小学校の制服を着たわが子を見ながら、あっと言う間に過ぎていった保育園生活を思い返していました。

厳粛な卒園式が始まり、一人一人に卒園証書を渡していきます。卒園式もクライマックスに近づいたころ、園長先生より訓話がありました。その一節より八木保育園の先生方がどんな思いで保育をされてきたのかを、深く知ることができました。

「子供たちの手には一人に一つずつ、種を握りしめて卒園します。今きれいに咲いている切花はすぐに枯れてしまいます。しかし、種は地面に植え、水をやり肥料をあげると芽が出て花が咲きます。やがて咲いた花は種を付け、またそこから花が咲くのです。これからの長い人生で大きく咲かせるための大切な種を、私たちはみなさんに渡しました。それをしっかりと持って必ず大きな花を咲かせてください。」と。

八木保育園は見栄えの良い大人受けする行事はありませんでした。見栄えのする行事。これはきっと見栄えのする大きな花の事なのでしょう。先生方からたっぷりの水と肥料をいただき、大きく咲いた花。明日になると、しおれてしまう花。そして来週からまた新しい花を咲かせるために、水と肥料でおなかがいっぱいに。

駿太朗に「八木保育園に教えてもらったことって？」て、聞いてみました。
「小さい子を優しくしましょう」
「Ｓ君とケンカにならない方法は？」
「みんなで仲良く遊ぶ方法は？」
当たり前のことばかりかもしれません。でも、これからの人生を歩んでいくうえで、とても大切な事ばかりです。

時に保育園に行きたくないと駄々をこねる日もありました。お友達と上手に遊べない。仲間外れになってしまう。と。でもこれも、人間関係を学ぶ第一歩。避けて通れない大切な対人スキルです。それを一人一人の個性を大切にしていただける八木保育園で経験できることは、親としてとても安心でした。駄々をこねる我が子を見ながら、にやりとするほどです。今で良かったと。

八木保育園からいただいた、多くの贈り物と、数多の困難をともに乗り越えていただけたことに感謝しています。　八木保育園で人生最初の６年間を過ごせて本当に良かった。

駿太朗は、固く握った手中の種からどんな花を咲かせるのでしょうか？　一年生の今、手中の種は少しずつ少しずつ成長しています。見事に咲いたその花を手に持って、再び八木保育園を訪れる日が来ることを期待せずには居れません。　（駿太朗の父親）

１４　役割遊びとしての研究誌発行　あとがきに代えて

園長　　清流祐昭

昨年６月、八木保育園の職員で原稿を書いて 10 ページほどの小さな冊子を出しました。セーケイ・イロナ先生の実地指導研修に合わせて、地域の教育に関心のある方々などに私たちの実践を知ってもらうことが目的でした。初めてのことで、かなり苦労をして作り上げたものだけに、反響が思いがけないところからあちこち寄せられたことは、とても嬉しい体験でした。

今年も、ようやく冊子ができあがりました。

私たちの実践を知って貰えることは、とても嬉しく、日々の保育にも励みになることと思います。しかしそれ以上に、冊子を刊行することを前提にそれぞれが文章をまとめる作業の中で、保育を客観的に見直したり別の書物を紐解いたり、また同僚と話し合ったと聞いています。園長と意見が食い違い、修正や補足を求められて、気分を害したこともそれぞれにあったと思います。私も、どう説明すれば分かって貰えるか、どう援助すればそれぞれの職員「等身大の原稿」が生まれてくるだろうか、どう構成すれば保育園の全体像が浮き出してくるだろうかと頭を悩ましていたのです。しかし、私はそういうことが盛んに起こったこと自体が、大いに意義のあることだと思うのです。

保育に喩えれば、子ども達が役割遊び（ごっこ遊び）に熱中して遊ぶことと通じていると思います。役割遊びでは、自分の体験や知識を織り交ぜて、いろいろな玩具を組み合わせて使い、また友達と会話をしながらながら遊びは発展していきます。時には意志がぶつかりあい、葛藤やトラブルが発生します。そういった諸々の中で、子ども達は多くのものを学びます。大人から一方通行の教育では得られない協同して学ぶことや、創造したり構成する力、社会性を養ってゆきます。その時保育士は、遊びが発展するように環境を整え、遊びの中心に入ることは極力避けながら、必要であれば遊びのきっかけを与えます。

私たちの文章は、仮に専門家から見れば拙いものであっても、できあがった冊子のはるか何倍もの収穫が、私たちの手元に残っていると確信します。「今年も研究冊子を出そう！」という呼びかけに応えてくれた職員に深く感謝し、編集作業が予定よりはるかに遅くなったことをお詫びいたします。

ありがとうございました。

八木保育園の考え方と実践２

2013 年 8 月 30 日 発行　著者　八木保育園保育者集団

2013 年 9 月 3 日 増補　編集　清流祐昭（八木保育園園長）

2013 年 9 月 5 日 増補　発行　八木保育園　info@yagi.ed.jp

2013 年 10 月 8 日増補　672-8016　兵庫県姫路市木場 1203-1

2013 年 10 月 23 日改訂　079-246-5060　FAX　079-245-9914

研究用資料です。許可無く複写・上映はご遠慮下さい。　Printed in Japan

＜参考 HP ＞　よい子ネット　八木保育園

http://himeji.yoiko-net.jp/yoikonet/user/yagi/blog/showDetail.do

QR コード対応の携帯電話をお持ちの方はこちらをご利用ください。→